

令和8年度「歩くまち・京都」推進会議 摘録

日 時：令和8年7月7日（火） 14:00～16:00

場 所：京都市役所分庁舎4階 第4～第6会議室

出席者：○青木 真美 同志社大学名誉教授
加藤 アイ 京都市地域女性連合会常任理事
亀井 邦彦 京都府商店連盟副会長
北村 裕喜子 公益社団法人京都府視覚障害者協会理事
◎塚口 博司 立命館大学名誉教授
中上 博幸 公益社団法人京都市観光協会事務局長
中西 恵一 京都府警察本部交通部長
原田 聡 京都府建設交通部交通政策課長
平山 耕吏 国土交通省近畿運輸局交通政策部長
細川 万理子 京都商工会議所産業振興部長
○山田 忠史 京都大学経営管理大学院教授、
京都大学大学院工学研究科教授

以上11名（五十音順、敬称略）

（◎：会長、○：副会長）

1 開会

○ 竹内副市長

日頃から「歩くまち・京都」の推進に向けて多大なご尽力をいただき、感謝する。

現在、公共交通を取り巻く環境は激変している。特にバス運転士の担い手確保は喫緊の課題であり、近年は採算性ではなく運転士不足を理由とした減便が増えている。

一方でテクノロジーも進歩しており、洛西地域では国の補助をいただきながら自動運転バスの実装に向けた取組を進めている。また、市バスでは来年度の導入に向けて、市民とそれ以外の方で運賃を変える「市民優先価格」の準備も進めているところ。

さらに京都駅周辺のあり方についても、有識者会議から駅前広場や交通のあり方を再考すべきとのご示唆をいただき、検討を進めているところ。

時代が変わっても、お年寄りや障害のある方、お子さんなど、車の運転が難しい方々に移動の機会を提供するという公共交通の重要性は変わらない。公共交通は街の賑わいや市民のQOL向上、そしてカーボンニュートラルへの貢献にもつながる不可欠なインフラである。

経済界においても、京都の交通のあり方について検討の気運が高まっているところ。本日は公共交通の現況にとらわれることなく、多岐にわたり自由活発な議論をお願いする。

2 報告

- (1) 令和7年度及び令和8年度以降の「歩くまち・京都」の主な取組について
- (2) 指標・モニタリング指標について

- 事務局

(資料3に基づき説明)

3 報告に関する質疑

- 中上委員

京都市の令和7年の観光客数は6,279万人、観光消費額も初めて2兆円を突破するなど、主要項目はすべて過去最高を記録した。中国客は減少しているが、日本人需要の回復や円安による他国からの需要増が下支えしている。

国の観光立国推進基本計画では、2030年にインバウンド6,000万人を目指しており、今後さらに観光客が増える見込み。一方で、外国人客が特定の観光名所に集中する傾向が目立ち、混雑緩和や観光マナーの啓発といった取組の強化が急務。

観光協会としても京都市と連携し、持続可能な観光の実現に努めてまい

る。

- 平山委員

先程ご紹介のあった観光客数の目標について、国ではリピーター4,000万人という指標も掲げている。リピーターは日本の交通やマナーへの理解が深く、地域との摩擦が生まれづらい。京都は他の地域と比較して初回訪問率が高く、リピーターが少ないと考えられるため、まだ光が当たっていない場所へリピーターを誘導し、公共交通を利用してもらうという視点も重要だと考える。

また、京都は近畿圏との比較で、外出率が高いのに対し、立ち寄り先も含めたトリップ数は低くなっている。これは外出を促す仕組みは高いものの、1回の外出における立ち寄り先が少ないという結果と考えられる。この点についても、今後分析してはいかがか。

○ 事務局

外出機会の創出は大事だと考えている。高齢者はもとより、様々な方に外出いただくにはどうすればよいか、引き続き研究してまいる。

○ 山田副会長

非自動車分担率は、この10年間実質横ばいの状況。しかし、アンケート調査における公共交通や外出への意識はコロナ前より低下しており、今後の非自動車分担率の低下トレンドへの転換に繋がりがねない。目標の85%に向けて、市民意識が低下している要因をピンポイントで分析・対策していくべき。

一方で、市民意識が低下しているにも関わらず、非自動車分担率が一定維持できているのは、京都市の広報の成果であるといえる。

○ 事務局

本市では、今年度から来年度にかけて「京都の都市交通のあり方検討」に取り組んでいく予定。今回いただいたご指摘を踏まえ、多角的に分析を進めてまいる。

○ 青木副会長

公共交通を便利だと感じる人が少なくなっている点を懸念している。昔と比べて買い物等の生活様式が変わってきているということもあり、まちのあり方の面からも、交通のあり方を見直していくべきではないか。

○ 塚口会長

公共交通を便利にする努力はもちろん間違っていないが、京都市民の住まいや働き方といった、交通以外のまちの構造なども分析しながら、今後のあり方を検討していく必要がある。

4 意見交換

「京都の都市交通のあり方検討」について

○ 事務局

(資料4に基づき説明)

(1)「本市の交通に係る現状・課題」、「令和8年度における調査・検討内容」について

<担い手不足対策>

○ 原田氏（石井委員代理）

京都府においても、持続可能な地域公共交通の確保に向けて、これまでから二種免許の取得支援など人材確保の取組を行っており、今後は公共交通の利用促進の支援等も進めてまいる。

<混雑対策>

○ 奥野委員（欠席のため事前に聴取した御意見を紹介。以下同じ。）

混雑緩和に向けた観光シーズンにおけるロードプライシングの試行実施や、今後の交通に影響を与える北陸新幹線の動向も踏まえた検討が必要である。

○ 北村委員

私たち視覚障害者は、公共交通を移動手段として非常に頼りにしている。近頃、多くの外国人がバスに乗っており、英語などで「席を譲りましょうか」と声をかけてくれるのはありがたく感じている。反面、車内に大きなスーツケースが2つも3つも持ち込まれていると、その間を移動して降りるのが大変である。視覚障害者への配慮について、歩くまち京都推進室や観光協会等も一緒に発信・啓発していただけるとありがたい。

○ 事務局

手ぶら観光については、観光 MICE 推進室において、交通局とも連携しながら SNS 等を通じた情報発信に取り組んでいる。具体的には、観光客の方にスマートロッカーや宿泊ホテルへの荷物配送サービスもご利用いただき、バスには大きな荷物を持ち込まないように推奨している。

○ 事務局

各事業者が取り組んでおられるマナー啓発について、「京都市交通バリアフリー推進会議」等でもこれまでから情報共有してきたところ。

スーツケースの車内持ち込みに関する啓発について、当会議などで情報共有されるように調整する。

○ 加藤委員

観光特急バスについて、観光客向けの路線を作るなら、どこをどう走らせたなら観光客がスムーズに移動でき、通常的生活路線と分けて乗ってもらえるのか、ぜひ住民の声を聞いていただきたい。

○ 事務局

交通局が実施している観光特急バスは、どなたでも乗車可能であるが、他の路線より少し高い運賃設定をし、停留所を清水寺や銀閣寺などに絞って主要観光地に早く到着できるようにしている。これにより、通常的生活路線の混雑緩和を図っている。運転士不足の観点から比較的余力のある土日祝日に運行している。

○ 山田副会長

京都市において観光と混雑は切り離せない。混雑は需要と供給のアンバランスで生まれるため、対策は需要を減らすかインフラを増やすかしかないが、今はその両方ともが対策できない、「飛車角抜き」の将棋をしているような状態。

現在京都市が行っている小さな工夫だけでは中長期的な課題解決に繋がらず、パラダイムシフトを検討していく必要がある。

例えば、混雑面で市民に不便をかける分、観光客を収入源として医療や教育などの市民生活に還元するというのが一つの手法。

○ 事務局

長年混雑対策の検討を行っているが、もう少し枠を広げた検討ができなかったのかということは反省点の一つである。市民生活と観光を両立する上で現状がどうなっているのか。加えて、現状を踏まえ、今後どのように進めて行くべきかなどについて、今年度以降、人流データなどの緻密なデータを活用し、学識の先生方からも意見を頂戴しながら、今の時代に即した形で進めていきたい。

<府市協調>

○ 原田氏（石井委員代理）

京都府では6月補正において、「京都次世代モビリティ戦略（仮称）」の策定に向けた基礎調査の予算を計上しており、公共交通機関の強化や利便性向上に向けた課題抽出などを行う予定。今後、京都市でも同様の調査を実施されるとのことで、互いに情報共有や連携を図りたい。

また、府市協調の取組として「千年の都・鴨川にぎわい創出事業」の予算も6月補正に計上している。鴨川の河川空間と周辺のまちづくりを一体的に整備し、沿道の歩行環境や接続強化による回遊性向上や賑わい創出を目指して詳細設計を行う予定。このようなハード面の取組も含めて、歩いて楽しいまちづくりの実現に向けて取り組んでまいらる。

○ 事務局

モビリティ戦略との連携については、本市としてもぜひ情報共有してまいりたい。引き続きよろしくお願いします。

<新交通システム>

○ 奥野委員

「新たな公共交通システムの導入」について、京都は昔から新しいものの好きの面もあるため、L R Tなど脱炭素化に繋がる最先端の取組を進めていただきたい。

○ 北村委員

自動運転の実証実験に関しても非常に関心を持っている。視覚障害者協会として、意見を伝える機会を設けていただきたい。

○ 事務局

自動運転については、昨年度レベル2での実証実験を行い、来年度末までにはレベル4の運行・認可を目指して、これから実証実験を行っていく予定。今年度の秋以降には、一般の市民の方も乗れる機会を設けていきたいと考えており、その際に視覚障害をお持ちの方にもご意見を伺いたい。

当面は運転手を完全に無くすということは難しく、車内で様々なサービスやサポートが必要な方もいるため、どのように対応していくかを一緒に考えていきたい。

<運賃制度>

○ 奥野委員

バス路線網を見直し、乗り継ぎを前提とする場合は、無料化など利用者の負担が増えない対策が必要である。

○ 青木副会長

市民の実感として、目的地へ行く途中で地下鉄などに乗り換えた方が早く行ける場合でも、乗り換えると運賃が高くなるからという理由で、結局は混雑したバスに乗り続けてしまう現状がある。

特定のゾーン内であれば均一運賃にしたり、バスと他の交通機関を乗り継いでも追加運賃が取られないようにしたりする工夫があった方が、市民にとっても旅行者にとってもありがたい。運賃体系について、よりダイナミッ

クに変えていけるような議論を進めていただきたい。

○ 加藤委員

地域女性連合会の行事で伏見の青少年科学センターや京都パルスプラザを会場として使用する機会がある。市中心部から鉄道を利用して移動する際には、竹田まで地下鉄、そこから先は近鉄となっている。運行事業者が違うことで、運賃制度も異なっているが、これが統一されることで利便性が向上するのではないか。

＜バリアフリー＞

○ 加藤委員

以前は徒歩や自転車でもどこまでも移動していたが、いざバスや地下鉄に頼る状態になってみると非常に不便さを感じる。地下鉄駅もエレベーターが少なく、高齢者がエレベーターを探して地上をぐるぐる回っている現状もあるため、ご配慮をお願いします。

○ 事務局

また、今年度から地下鉄駅へのエレベーター増設に向けた検討に着手したところ。設置場所の確保や地下埋設物の状況など物理的・技術的に難しい部分もあるが、利便性向上に向けて引き続き検討を進めてまいる。

（２）「望ましい公共交通ネットワーク像」と「歩いて楽しいまちづくり」の更なる推進

＜地域の輸送資源の活用＞

○ 平山委員

地域の輸送資源の活用について、京都市は少子高齢化で輸送人員が減る一方で、観光需要への対応という課題に直面している。交通局以外の交通事業者との連携を深めるのは当然ながら、学校、病院、介護・福祉施設などの送迎を分野横断的に捉え、共同でバスを運行する視点も必要ではないか。他地域では病院の無料送迎バスと民営バスを統合し、病院側のリスクや負担を減らしつつ充実した交通網を構築した事例もある。

○ 事務局

「地域公共交通の活性化及び再生に関する法律」の改正により、地域の輸送資源を活用する仕組みが今後作られていくものと承知している。本市の

「地域公共交通計画」においても、担い手不足という課題がある中で、地域の足を守るため他分野と連携して公共交通を維持していくことを掲げているところ。

京都市は都心部もあれば周辺部、中山間地域等もあり地域の実情が異なるため、交通事業者に限らず、輸送サービスを担う様々な方々と手を携えて、地域に応じた形で今後も取り組んでいきたいと考えている。

＜移動の創出＞

○ 平山委員

移動の創出や移動自体の価値という視点も念頭においていただきたい。地域の小さなモビリティに乗ると、運転手と乗客の温かい会話によく出会う。住民の方が生きがいを持って運転されている姿を見ると、こうした心の繋がりがこそ重要だと感じる。将来や周辺部を見据えると、こうした観点が非常に大切なのではないか。

○ 亀井氏（上田委員代理）

家に居ながらにして買い物や各種手続きを済ませられるようになった。これは、商店街を含むまちの賑わいの創出の観点ではマイナスであるが、「混雑を回避するために、外出しなくても用事を済ませられるようになった」という見方をすることもできるのではないか。

○ 事務局

交通や移動を目的のための派生需要としてとらえるのではなく、移動のプロセス自体を一つの価値として楽しむといった視点も必要である。

＜混雑対策＞

○ 亀井氏（上田委員代理）

市バスへの大きな荷物の持ち込みは有料化し、通路を塞ぐような更に大きな荷物については持ち込み自体を禁止することができるのではないか。併せて、その旨のバス停への表示やタクシー利用の推奨など仕組みづくりもお願いしたい。一番大事にすべきは「人」であると思う。

＜新交通システム＞

○ 中西委員

自動運転については、警察庁からも各自治体と連携し進めていくよう指示を受けているところ。将来的に、全ての車両が自動運転に置き換われば、

交通の取り締まりや交通事故の捜査が不要になり、皆様が安全・安心に暮らしていける世の中に繋がる可能性もある。

交通管理者として、安全と円滑に向けて皆様とともに取り組んでまいりたい。

<公共交通のあり方>

○ 平山委員

公共交通のあり方については、現状の混雑や観光地の状況等の目の前の需要への対応にとどまらず、将来的にまちづくりとしてどうあるべきか、都市計画や立地適正化計画も踏まえた中長期的な視点で検討していくべき。また、京都市域のみならず京都府・滋賀県の広域周遊を目指すような、観光政策との連携も考える必要がある。

○ 亀井氏（上田委員代理）

京都のまち自体のキャパシティに限界があり、飽和状態ともいえる。本来に京都に憧れておられる方、文化等を理解されている方に来ていただき、楽しいと感じていただけることが重要。それが、京都のまちにとってプラスであり、交通に関しても同じではないか。

○ 山田副会長

現在の自動運転バスは、広くて空いている道ならスイスイ走れるが、他の車や歩行者が入り乱れる中ではまだ安全な運行ができない状態。一方、今後自動運転バスがまちなかも運行できる世の中になれば、その頃には自家用車の自動運転化もかなり進んでいるはずだ。そうすると、移動手段を公共交通から自家用車に転換する人が増えるのではないかとされている。

職住近接のライフスタイルを推進し、そもそも過度に移動しなくてもいい都市構造を作ること、つまりパラダイムシフトが必要。短期的には、観光特急バス等の対症療法も必要であるが、中長期的には、京都の人にどのような暮らしをしてほしいのか、またそれに伴いどのように土地利用を進めていくべきかという問いを踏まえたうえで、自動運転バスやLRTの導入の検討も含め、公共交通について検討していく必要がある。

○ 事務局

これまでの都市計画マスタープランにおいては、交通政策についての記述が多くなかった。今回の「京都の都市交通のあり方検討」の中で、京都市の機能をどこに配置し、どのように移動するのかという都市計画の要素をし

っかりと検討したうえで、京都市の将来像と交通体系を一元的なものとして次期都市計画マスタープランに盛り込んでいきたい。

今回、皆様からいただいたご意見も含めて、今後は幅広くまちづくりと交通政策を連携させながら考えていきたい。

<上記以外の視点>

○ 奥野委員

今後の歩くまち京都の検討課題として、「歩いて健康なまち・京都」の観点でも更に進めていただきたい。

○ 細川委員

本日、多様な立場の方々の意見をお聞きした。経済界だけで話をしていると、京都が経済的にどのように潤うかという視点に偏りがちであるが、そればかりでまちづくりを進めてはいけなと改めて感じた。観光客と市民がお互いに **Win-Win** の関係になれる公共交通システムを総合的に考えていかなければならない。我々経済界としても、京都市や皆様と意見をすり合わせながら検討を進めていきたい。

○ 亀井氏（上田委員代理）

京都駅前広場を民間も巻き込んで立体化するなど、より素晴らしい空間に再開発していただきたい。

（３）総括

○ 塚口会長

本日は様々な視点から御意見をいただき感謝する。

歩くまち京都総合交通戦略の推進に取り組んでいる中、社会が大きく変化しており、前提となるような全体の状況が変化するとギャップも生じる。それに伴って、戦略を柔軟にアップデートすることが必要。

交通計画等を専門とする者は、交通は手段であって目的ではないと捉えるのが通常だが、移動自体にも意味のある場合がある。健康につながったり、いろんな新たな楽しみが出たり、そういった面もある。人の移動を深掘りするための調査が必要。ただし、いくら精緻に調査し、分析しても、それだけで的確な計画が策定できるわけではないわけで、将来どのような都市像を目指すのか、これについて議論し、明確にしておくことが必要である。

自動運転といった技術革新の話も出ていた。新しい技術をうまく取り入れて、それを実装していくことが必要。その場合も、本質、核心に迫る、実

装手法、分析手法をとりまとめて、その結論に導くプロセスが重要。それには、少数の関係者だけでなく、多くの関係者の多面的な関わりが必要であるため、そうした方の協力を得られる場を作ることが必要。まさにこの会議はそういった場である。また、事務局と各委員は日頃から繋がっているので、こうした会議に限らず、委員の声も十分に聞いていただいて、反映していただければ、この会議の意義もより大きくなると思う。

5 閉会

○ 平井まちづくり政策監（都市計画局長）

本日は、長時間にわたり熱心な御議論をいただき、感謝する。

京都市では、新たな価値や文化・産業を創出して都市課題を解決し、京都全体の魅力を高めていく「新京都戦略」を掲げている。そのためには人が集い、つながり、混ざり合うことが重要であり、公共交通が人の移動をしっかり支えることが不可欠。

本日の意見交換のテーマである「京都の都市交通のあり方検討」について、皆様から長期的な視点やパラダイムシフトを見据えた、夢のある温かいご議論をいただき大変心強く感じた。

いただいた数多くの知恵やご意見を、いかにして確かな現実落とし込んでいくか、これから楽しみながら悩んでまいりたい。引き続きご指導とご協力いただくようお願い申し上げます。